



(仙台)

宮城・仙台城跡(二の丸地区)

1 所在地

宮城県仙台市川内

2 調査期間

- 一 第四次調査 一九八七年(昭62)七月～九月
- 二 第二二次調査 一九九三年(平5)六月～一〇月
- 三 第一七次調査 二〇〇〇年三月～十二月

3 発掘機関

東北大学埋蔵文化財調査研究センター

4 調査担当者

- 一 梶原 洋・佐久間光平
- 二 藤沢 敦・関根達人・菊池佳子
- 三 藤沢 敦・関根達人・京野恵子

5 遺跡の種類 城跡・軍

6 遺跡の年代 近世、近代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

仙台城跡二の丸地区は、仙台市街地の西方、広瀬川の対岸、通称青葉山の東端

に位置している。本丸・三の丸とともに仙台城を構成する一部である。二の丸は、造営以後、主に仙台藩の政治・諸儀式の中心として機能するようになり、二代藩主以降は、その居館となったところである。造営以前には、この場所に伊達政宗の四男伊達宗泰の屋敷が置かれていたと考えられている。また、政宗の長女五郎八姫の帰仙に際して、その居館である西屋敷が造営された場所でもある。

東北大学構内の施設整備に伴って、これまで一七カ次の調査が行なわれており、西屋敷や二の丸の建物の一部などが検出されている。

第四次調査地点は、二の丸北東部東側外郭線付近に相当する。木簡は江戸時代初頭の六a層から一点が出土した。

第二二次調査地点は、二の丸と北方の武家屋敷地区を区画していた堀の北岸付近に相当する場所である。木簡は三層、三a層、三c層、三d層、四層、一号溝、三号溝などから計七三点が出土した。これらは、日清戦争前後から第一次大戦前後、一九世紀後半から二〇世紀初頭頃までのものである。

第一七次調査地点は、二の丸の中でも妻妾の居住域である「中奥」の、西端を区画する堀付近にあたる。木簡は七号土坑(二八世紀末葉～一九世紀初頭)から一点、一九号土坑(二八世紀末頃)から一点出土した。また、二九号土坑(一八世紀頃か?)からは木簡二点が出土した。

8 木簡の釈文・内容

一 第四次調査

- (1) ・「○□宇右衛門」
 ・「○□」
 165×21×5 051

表裏に墨痕が認められるが、判読できたのはその一部分である。
 形状から荷札木簡と考えられる。

二 第一二次調査

三層上面

- (1) ・「○仙台輜重兵第□兵
 小□□太郎様□」
 ・「○山形」
 152×52×9 011
- (2) ・「○事務用」
 ・「○第一中隊」
 90×52×8 011
- (3) ・「仙台河内輜重兵
 第二大隊第一中隊ノ四」
 ・「平小四郎」
 145×(47)×9 081

- (4) ・「仙台輜重兵第二中隊
 第四班内
 伊藤武蔵殿」

・「北海道西中川郡
 伊藤□□出シ」
 151×45×5 011

- (5) 「仙台輜重兵第□大隊
 第壹中隊
 菅原泰助様」
 135×(59)×3 081

三層

- (6) ・「仙台輜重兵第二大隊第二□」
 ・「泉岡□」
 136×(15)×3 081

層位不明

- (7) ・「○伝騎用」
 ・「○伝□」
 150×28×6 011

三a層

- (8) ・「○竹田□」
 ・「○□」
 52×29×6 011

- (9) ・「。ワセリン」
 ・「。ワセリン」
 57×29×6 011
- (10) ・「仙台輜重兵第二大隊第一中隊」
 ・「仙台輜重兵第一中隊」
 福島県耶麻郡姥堂□
 大原新貞出
 189×(34)×6 081
- 三a~三c層
- (11) ・「。□□班」
 甲□□
 132×52×8 011
- (12) ・「アキ」
 秋華□□
 ・「秋□□」
 89×55×11 011
- (13) ・「仙台輜重兵第二大隊」
 第二中隊四務班。
 戸村房芳殿
 福島県石城郡内郷村。
 宮炭鉦二号舎。
 戸村亀□□
 158×55×7 011
- (14) ・「仙台輜重兵第一大隊」
 第一中隊三。
 石川義治様行キ
 ・「安達郡小浜町□□小□成□」
 字小□
 石川□太郎様□キ
 155×55×7 011
- (15) ・「仙台輜重兵第二大隊第二中隊」
 五十嵐儀藏殿行キ。
 五十嵐久米藏
 ・「。□□宮長作□□」
 199×55×6 011
- (16) ・「仙台輜重兵」
 第二大隊第一中
 隊一班
 山科金藏様行
 ・「山形県最上郡」
 萩野村字赤坂
 山科作兵衛
 65×58×5 011
- 三d層
- (17) 「大正二」
 分数□□
 43×30×3 011

第一次大戦前後の年代であると推定する。木簡は、兵士個人への荷

- 第一次大戦前後の年代であると推定する。木簡は、兵士個人への荷物の送付に使われた荷札木簡や、軍隊内での用品に付けられたと考

167×(27)×7 081

三 第一七次調査

- 45×24×5 011

七号土坑

- (1) ☐ 助

内助助

- $$227 \times (30) \times 2 \quad 081$$

178×30×2 061

- 226×(62)×5 081

一九号土坑

- (2)
- 野□
様様

$$(45) \times 36 \times 4 \quad 081$$

- 107×31×6 011

二九号土坑

- (3)
- | | | |
|-----|-----|---|
| □ | □ | □ |
| 左衛門 | 孫太夫 | 殿 |
| 殿 | 殿 | 殿 |

伊甲
□□

- 163×43×6 011

$$(84) \times 53 \times 3 \quad 081$$

これらの木簡は陸軍第二師団の輜重隊が廃棄したものであると考えられる。年代の明確な遺物などから、およそ日清戦争前後から

- (4) \square

(60) $\times (39) \times 1$ 081

(1)は、曲物の側板に墨書が認められる。
(2)(3)は上下端が欠損しているため内容は不明であるが、いずれも人名が記載されていると考えられる。

(4)は、木目に沿って割れやすい非常に薄い板に記載されており、上下左右ともに欠損しているため、墨痕は確認できるが判読はできていない。

9
関係文献

東北大学埋蔵文化財調査委員会『東北
大学埋蔵文化財年報四・五』（一九九二
年）

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
『東北大学埋蔵文化財年報一一』（一九九九年）

同『東北大学埋蔵文化財年報一八』

(二〇〇四年刊行予定)

(柴田恵子)

